

メンデルスゾーンの形而上学
—また一つの哲学史—

はしがき

中島義道氏のカント伝、『カントの人間学』(旧題『モラリストとしてのカント I』)には、「22歳でケーニヒスベルク大学を卒業した彼には、不安定で貧しい長い長いフリーターの生活が待ち構えていた」とある。

「彼は生活のためにマギスターの学位を得るまでの九年間にわたって、適性の疑わしい家庭教師の地位に甘んじた。その後学位を得て、大学の私講師になったのがようやく1756年、カント31歳のときであった。そしてやっと運命が彼に微笑みかけたかに見えたが、正教授のポストは残酷なほど彼の手をすべり抜けてゆくのであった。彼は常勤の教授になるために、その後たつぷり15年待たねばならなかったのである」。

ブックという「たいした業績もない同僚」に正教授の座を奪われたカントにめぐってきたのは「王立城内図書館副館長」という「訳がわからない職」であった。しかし、そのカントが46歳にして教授職の座に就いたことは、彼がやはりアカデミズムの成員であったことを物語っている。

「カントとその周辺」ではない、メンデルスゾーンとその周辺の哲学は、アカデミズムとその外部という緊張関係においてある。同じ図書館員の仕事でも、レッシングがヴォルフエンビュッテルに赴いた理由は何であったか。税関で働き続け倉庫の管理人にまで昇進したハーマンがカントのことを「小さな学士」と呼ぶ時、彼の念頭に浮かんでいたのは何であるか。会計係として工場で働き続けたメンデルスゾーン、扉の外からバウムガルテンの講義に耳を傾けたニコライ——或いはヤコービも含め、彼らがベルリンという大学のない街を中心として繰り広げた出来事は、「研究者」としての立ち位置を相対化できない限り見えてはこないものである。

研究者が変われば研究対象も変わる。

もう一年ほど前のことであるが、芹沢俊介氏が「思想としての在野学」(『在

野学の冒険』所収)という一編において、「民間学」(鹿野政直)という用語を紹介された。その説明として引かれているのは、『民間学事典』(1997年)にある鶴見俊輔の定義である。それによると、民間学とは「官学」に対置されるものである。鶴見はそれを「専門家による学問」としているが、その土台が「学校制度」であることからして、端的に「官学」とそれは表現されもする。

従来、哲学史におけるメンデルスゾーン評価は、「ライプニッツ＝ヴォルフ学派」と「通俗哲学」という二つの概念によって基礎づけられてきた。「アカデミズム」という言葉は和製英語のようである。それと「在野」との対立という構図を彼の生きた時代に読み込むのは時代錯誤であるばかりか、そのような構図を認めること自体が一つの恣意なのだろう。しかし、およそ史観とは後代の恣意であるし、やはりそのような対立を容れた方が「メンデルスゾーンとその周辺」を眺め入るには便利である。

それは、法学を中心とした官制大学であるハレ大学の設立からベルリン大学の設立へと至るまでの一時期に起こった、「学校哲学」とも訳される講壇哲学と、それがまた形而上学をドイツ語に翻訳するという試みであったことが必然的に招来する哲学の「通俗化」、そして、それがやはり哲学であることからする必然の帰結、その「思想現象」(戸坂潤)としての現出、つまりは在野における思想の形成である。

「ライプニッツ＝ヴォルフ学派」と「通俗哲学」に関しても、こうした観点からして理解できる。ベックの有名な哲学史には、「ライプニッツ＝ヴォルフ学派」を扱った項目において、当時の大学教授たちの名が列挙されているが、確かに、いわばその実数を挙げる以外にこの「学派」なるものを定義する術はない。それは一つのアカデミズムであった。「通俗哲学」なるものがあったとすれば、それはこれに対する反動である。

18世紀のドイツには学生数が数十人規模の大学がいくつかあったが、おしなべて19世紀の初頭までに姿を消している。学芸学部を例にすると、学生数がおよそ二倍に増える一方で、卒業率は低下、大学の統廃合が進んだのである。自由学芸の衰退が哲学部の変容を迫ったことも意味深である。就職難が神学部の学生数を上げていたことは、学生たちにとっても「学部の争い」があった

ことを物語っていようか。本書にも何度か登場するズルツァーはギムナジウムの教授であるが、これはさしずめ現代日本における高専の教授といったところか。当時はギムナジウムが大学に昇格した例も多くあったことを付言しておく。

本書にも一度だけ登場するプレッシングが奉職したドゥイスブルク大学は、17世紀の半ばに設立、学生数は多くて百人程度、1818年に閉鎖されている。同時期に設立されたアルトドルフ大学が二、三百人ほどの学生数を五十名以下へと減らしながら、1809年に閉鎖されていることも銘記しておこう。

哲学史は大学圏という空間的な布置を容れなくてはならない。

ラテン語で書き続けた時代遅れのプルケーが、チュービンゲン大学という15世紀末に設立された中世の大学に身を置いていたことは、彼の影響力を測る上での一つの指標である。

この時期、十を超す大学が統廃合の憂き目に会っているが、それによる人材の移動は教授陣だけではない、学生たちも巻き込んだ動きであったはずである。大学入学試験が制定されたのもこの時期である。公教育制度の拡充が図られる一方で、農村育ちの若者たちはギムナジウム出身の若者たちと差別されるようになる。

「学位」と「学歴」が重なるのはこれ以後のことである。

ヴォルフの謳った「哲学する自由」——それがハレ大学に倣いつつも宗教的寛容を深めたゲッティンゲン大学において花開き、ヴォルフを中心とした哲学界にも揺らぎが生じる。官房学講座の導入を俟って、ハレ大学は保守色を強めていく。初期のヴォルフ批判は神学と哲学との対立、つまりは領邦大学が抱え込まざるを得なかった宗教問題として理解できる。それはヴォルフ哲学がライプニッツ哲学と同じ弱点を抱えているという批判であった。

それに対して、「歴史家」を名乗るゲッティンゲン大学の哲学教授ヒスマンに始まるヴォルフ批判は、むしろそれがライプニッツ哲学の亜流であるという批判であり、いわば哲学という学問における内部批判である。同大学が積極的に他大学からの人材の引き抜きを行っていたことも見逃せない。有名な図書館設備も同大学における哲学史研究の進展を支えた一つの要因であろう。

イエナ大学における批判哲学の受容が始まる前に、ドイツの大学圏は動乱期に突入していたのである。「ライプニッツ＝ヴォルフ学派」の凋落はこうした動きと無関係に起こった出来事ではない。

そうした動向を察知し、不安を感じていたのは、ハレ大学の哲学教授エーベルハルトである。しかし、その不安はベルリンのメンデルスゾーンに伝えられたのであった。

通俗哲学に関しては、小谷英生氏の博士論文「ドイツ通俗哲学の理念とカント批判哲学の誕生」が近く刊行の予定であるから、ここで卑見を述べることはしない。ただ、「アカデミズム」との関連からして、一点だけ述べておく。

桑木嚴翼が次のように述べている。「此哲学を単に嘗て存在した哲学として考へること、即ち哲学史中の一部分として考へることと、我々の思想体系の一要素を作るものとして考へること、の二つの見方があって、其間に態度の相違がある。メンデルスゾーンの哲学を研究して自分の今日の思想を作る材料に使ひたいといふ場合と、哲学史の一事件として、自己の考は姑く之を度外視して、公平に一の客観的事実として取扱ふといふ場合と、自ら違ひがある。併しながら是は何れも哲学の専門上から見た研究の仕方であるが、更に全く違った態度がある。蓋し哲学は元来一の文化現象であつて、其点に於て他の芸術とか宗教とかいふものと同じように取扱はれ得るものである。(中略)即ち今日の芸術鑑賞の眼から云つて極めて価値の低いものであり、或は宗教の理想から云つて甚だ迷信的なものであつても、一の文化的産物としては重きを置かなければならぬと同じやうに、哲学を一の文化現象といふ点から見ると、學術的の意味に考へて見て余り価値のないものであつても、一般文化に対する関係といふ所から見て意味のあるものがある。今日の哲学に於ても随分さういふ事がある。一部分の専門家の人のみに喜ばれるやうなものを、私は講壇哲学と名付けて居るが、其の講壇哲学は哲学として實際の価値のあるものであるけれども、又一方に言葉は少し当らないが通俗哲学とでも称すべきものがある。専門家から見ると粗雑とか或は基礎薄弱とかいふ非難が出るが、然し其社会上に於ける影響が非常に大きい場合には矢張り之を度外視する事は出来ない、此の如きものを名付けて通俗哲学といふ。而して文化史と

いふ点から見れば、専門学者の間に賞玩される所の講壇哲学よりは一般社会に影響の多い通俗の方に寧ろ重きを置かなければならぬ場合が起る。此の如く哲学史的に見る場合と、文化史的に見る場合との区別が出来るが、其の文化史の上からいふと啓蒙時代の哲学は意味の多いものである。

しかし、この「文化史的」な見方が、実は「哲学史的」な事実として当代に読み込めるのである。もう少し言うと、その「客観的事実」なるものが「文化現象」に他ならないのであって、「哲学史の一事件」とはまさにそのようなものでなければならぬ。この時、桑木が「通俗哲学」に言及していること自体、一つの時代的な「文化現象」なのである。出隆の『哲学以前』の序における用例もそうした現象の一端である。

哲学史家は、自身「哲学史」の外部に身を置くことはできない。

なお、本書でも多くを割いた『暁』とも『暁の時』とも訳されるメンデルスゾーンの著作『朝の時間』であるが、桑木はこれを意を尽くして『晨朝の講話』と訳していることを哲学史家の無視してはならない「客観的な事実」として附記しておく。リールの哲学史をひも解き、講義にハーマンの全集を用いたこともある桑木の講義ノートか学生たちの写したノートが一冊でも残されていれば貴重な資料である。その『著作集』はなぜか上の引用文が含まれた第三巻しか出されていない。しかし、宮島光志氏が日本カント協会第35回学会(於新潟大学)での発表で言及されたように、その「理由は不明」である。

本書の出版に際しては、博士論文の審査に際して副査を務めて下さった松永澄夫先生に出版社をご紹介いただき、同じく副査を務めて下さった村田純一先生には出版前に改めて原稿を丁寧に読み返していただいた。この場を借りて両先生に御礼申し上げます。また、『純粹理性批判』の読みを伝法して下さった指導教授の湯浅正彦先生に感謝申し上げます。お授け下さった口伝を頼りにいつかその文底秘沈を私なりに解いてみせますこととお約束します。なお、出版費用の一部は立正大学大学院文学研究科より受けた助成金により賄われている。出版事情の厳しい中、刊行を引き受けて下さった東信堂の下田勝司様に、この場を借りて御礼申し上げたい。

メンデルスゾーンの形而上学—また一つの哲学史—

目 次

はしがき	i
序 論	3
第一章 メンデルスゾーンの「懸賞論文」(1762年)	25
第一節 形而上学の方法について	29
第二節 「豊饒な概念」について	33
第三節 形而上学の明証性について	38
第四節 神の存在の存在論的な証明	40
第五節 デカルト的な証明とデザイン証明	44
第六節 ヘルツの訪問	50
第二章 カントの『証明根拠』に関する書評(1764年)	59
第一節 「単に可能的な概念」というパラフレーズ	60
第二節 「或る物が可能的である」という証明根拠	66
第三節 「端的に必然的な或る物が現存する」ことの証明	75
第四節 メンデルスゾーンの反論	81
第三章 ヘルツ宛の手紙(1778年)	99
第一節 「ア・プリオリに論証された神の現存在」	100
第二節 ヘルツの反論	109
第四章 メンデルスゾーンのスピノザ解釈	117
第一節 『哲学対話』(1755年)におけるスピノザ解釈	119
第二節 ヘーゲル派の哲学史家によるメンデルスゾーン批判について	123
第三節 プラーテン宛の書簡(1769年)におけるスピノザ解釈	125
第五章 『朝の時間』(1785年)	133
第一節 『朝の時間』の「予備知識」	140
第二節 「感性的な認識の明証性」について	146

第三節	認識の三重の源泉……………	149
第四節	論文「蓋然性について」(1756年)……………	154
第五節	三種の認識……………	160
第六節	メンデルスゾーンの像論……………	169
第七節	ランベルトの影響……………	173
第六章 『朝の時間』 第五講～第七講……………		193
第一節	「或る物」としての「形而上学的な自我」について……………	194
第二節	「自己を定位する」こと……………	201
第三節	観念論者との対話……………	207
第四節	対話の続き……………	214
第七章 『朝の時間』 第八講～第十二講……………		223
第一節	学としての形而上学……………	224
第二節	ア・プリオリな証明方法とア・ポステリオリな証明方法……………	229
第三節	「思弁的な理性」に抗うために……………	233
第四節	像論の転回……………	239
第八章 『朝の時間』 第十三講～第十五講……………		251
第一節	「スピノザ主義」論駁……………	252
第二節	レッシングの「純化されたスピノザ主義」……………	257
第三節	メンデルスゾーンの自我論的な像論……………	263
第四節	レッシングの残像……………	270
第九章 『朝の時間』 第十六講～第十七講……………		279
第一節	第十六講……………	281
第二節	神の現存在のための「新しい証明」……………	284
第三節	「新しい学的な証明」の検討……………	290
結 論……………		303
	参考文献一覧……………	311
	人名索引……………	323

著者紹介

藤井 良彦 (フジイ ヨシヒコ)

1984年生。文学博士。

共著に『在野学の冒険』(山本義隆、芹沢俊介他、批評社、2016年)、論文に「独学者たちの啓蒙主義」(『立正大学哲学会紀要』10号、2015年)、「ベルリン自由学校について—最初のフリースクール—」(『ユダヤ・イスラエル研究』29号、2015年)、「すべてを粉碎するカント—メンデルスゾーンにとつてのカント「前批判期」の意義について—」(『日本カント研究』17号、2016年)など。

立正大学大学院文学研究科研究叢書

メンデルスゾーンの形而上学—また一つの哲学史—

2017年 1月31日 初版 第1刷発行

[検印省略]

定価はカバーに表示してあります。

著者©藤井良彦／発行者：下田勝司

印刷・製本／中央精版印刷

東京都文京区向丘1-20-6 郵便振替00110-6-37828
〒113-0023 TEL (03)3818-5521 FAX (03)3818-5514

発行所
株式会社 東信堂

Published by TOSHINDO PUBLISHING CO., LTD.
1-20-6, Mukougaoaka, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0023, Japan
E-mail : tk203444@fsinet.or.jp <http://www.toshindo-pub.com>

ISBN978-4-7989-1408-4 C3010 © Yoshihiko Fujii